

豊明希望チャペル礼拝

2026/8/9

「彼女たちは仕えた」

ルカの福音書 8 : 1～3

最初からすみません・・・間違い訂正です・・・そして、事情説明です。

前回のところ 7 章の終わりでは、37 節で「罪深い女」と言われる女が、パリサイ人の家で、香油をイエス様の足に塗った話を見ました。私はその際、この女が、イエス様の最後の日々に、イエス様の足に香油を塗ったマグダラのマリアと違うということを言いまして、7 章のこの女を、マグダラの女と区別して、ベタニアの女と呼び、またマリアとも言われているとも言いました。長らくそう考えられて鬼面もありますが、しかし、詳しく調べると、いくつも確定してない説があるようなのです。そもそもマグダラのマリアとベタニアの女が区別されたのは、カトリックでは最近のことで、さらには、そのベタニアの女が、ルカの福音書の罪深い女かとい



うと、同一視はされる場合もあれば、違うとも言われるのです(さらに、この女が、ラザロのマリアと同一視される場合もあって・・・)。まあ、ややこしいですが・・・(←ピエール・シュブレイラス《シモン：ルカのパリサイ人のシモンではなく、ベタニアのシモンの家の宴》1737 年 ルーヴル美術館)ざっくり、イエス様の足に香油を塗った女が、聖

書では、ほぼ 3 人見る事が出来るということです。じゃあ 3 人でいいよねと言うことかという、やっぱり同じ香油を塗る女の話が、3 人も出てくるというのは、やっぱり何となく自然じゃないよね、じゃあ誰と誰が、同一なんだということで・・・たとえば、その説明として、このようにあります。

「ベタニアの病人シモンの家①で「一人の女」がイエスの頭に香油を注いだ話(マタイ 26、マルコ 14)は、パリサイ派のシモンの家②で「一人の罪深い女」が涙でイエスの足をぬらして髪の毛でぬぐい香油を塗ったというルカの福音書(ルカ 7・36 以下)と同一視され、さらに、一人の女=罪深い女=マグダラのマリア③、とされました。さらにまた、ベタニアのマルタ・マリア・ラザロの家での出来事として、マリアがイエスの足に香油を塗り髪の毛でぬぐったというヨハネの記事から、マグダラのマリアはベタニアのマリアとも同一視されました。これらの物語

がもともと一つの出来事に基づくものかどうか・・・聖書は沈黙しています。」

「同一視された」という言葉が繰り返されますが、区別されたり、同一されたりが、様々言われてきたと言うことです。

私、これを整理しながら、ずいぶん長く、自分なりに結論が出ないかと考えていたのですが、だんだんと頭がパンクしてきまして、次第に、そもそも、こんなにややこしくした犯人の一人がルカだと言うことに気づいてきたのです。私に言わせれば、ルカは、女性のエピソードを、取り上げすぎだと言うことです。前回の罪深い女に加えて、今日は、マグダラのマリアだけでなく、多くの女性に触れています。短い箇所ですの、3 節まで、今一度読みます。

「8:1 その後、イエスは町や村を巡って神の国を説き、福音を宣べ伝えられた。十二人もお供をした。8:2 また、悪霊や病気を治してもらった女たち、すなわち、七つの悪霊を追い出してもらったマグダラの女と呼ばれるマリア、8:3 ヘロデの執事クーザの妻ヨハンナ、スザンナ、そのほか多くの女たちも一緒であった。彼女たちは、自分の財産をもって彼らに仕えていた。」

7 章で罪深い女の救いに触れた後、ルカは、マグダラの女マリアと、廣での執事クーザの妻ヨハンナ、そして、素性の説明のないスザンナ、そして、ルカは、本当は、もっと名前を並べたいが割愛して(やめてくれ・・・)、「そのほか多くの女たちも一緒・・・」と、何か、名前を言及したげな・・・ルカさん、もうややこしくなるし、くどくなるので、名前は割愛しましょうと言われたのか言われなかったのか・・・



いや、言わしてくれと、彼女たちは、自分の財産をもって彼らに仕えていたのだとこれだけは言わせてくれと、付け加えたような、そんな書き方に、私には見えたのです。

実は、この8章から10章の一つのテーマは、「イ

エス様の弟子達」です。

各章の、冒頭にこうあります。

「8:1 その後、イエスは町や村を巡って神の国を説き、福音を宣べ伝えられた。十二人もお供をした。」

「9:1 イエスは十二人を呼び集めて、すべての悪霊を制して病気を癒やす力と権威を、彼らにお授けになった。」

「10:1 その後、主は別に七十二人を指名して、ご自分が行くつもりすべての町や場所に、先に二人ずつ遣わされた。」

12 人の言及。12 人の役割。さらに 72 人を指名。と、いずれも、そのテーマが、弟子達の派遣に触れていることがわかるのです。しかし、そこで、触れられるのは、いずれも、全員、男性です。これから、3 章に渡って、その男性の使徒や弟子達のことに触れておきますが、最初に言っておきます！と。

彼らの背後には、彼らを支え、仕えた、多くの女性達がいたのだ。何なら、彼らの誰よりも、多くの金銭、金額を援助した彼女たちがいたのだということを、最初に言っておく・・・とばかりに、12 使徒の指名(8:1)の前に、罪深い女に触れ(やめてくれ・・・ややこしいから)、指名直後にも、まだ、使徒達の名前に言及する前に、この群を支えた、イエス様とその弟子達の宣教の働きを背後で支えた、女たちの名前にしっかりと言及していると言うことです。

ルカ先生、整理するのがややこしいですから、やめてくださいと言っている私の苦労もかえりみず、もしかしたら、もうそのくらいにしたらどうですか？と助言したかも知れない、ルカの隣にいた筆記者の言うことも聞かないで、また、今も私に向かって、林さん、マグダラのマリアもすごいけど、ライ病の家の、ベタニアの罪深い女の役割、さらには、そのベタニアとは別の、パリサイ人の家に乗り込んだ(先に触れた同一人物という節もあるが)、罪深い女の役割も素晴らしいものがある・・・と、わたしは是非、触れたいのだと、触れねばならないのだと言っている、そのルカの思いを聞くような思いがするということです。

そして、それは、今日の箇所、最大の強調点であり、今朝、私たちへのメッセージであると言えるのだと思います。

ルカは、イエス様の宣教の証言者にさまざまなことを聞き、あるいは取材する中で、マルコ、マタイの福音書に是非、加えたいことがある、だからルカの福音書を書く必要がある、その大きな理由の一つが、イエス様と、使徒達、弟子達・・・それだけではない、その背後にあって、支えた女性たちがいるということを、後の世代のクリスチャンに、知ってもらいたい、伝えたかったということなのではないかと思うのです。

パリサイ人が離縁状を渡せば、妻を離縁してもいいですよとイエス様に問うたとき、それは、気に入らなくなったら、妻を捨てて、別の女性と結婚しても、それは、男の権利ですよということを意味しました。イエス様がダメだと言った時、それを聞いていた、イエス様の弟子達でさえ、だったら、独身でいる方がいいやと、イエス様に文句？を言ったとあります。当時、女性の立場というのは、そういうものだったということです。

ルカは、女性の使命と役割は、目立たないものかもしれないが、使徒達、男性の弟子達が持つと同じくらいの、大きな役割と、その役割の重さがあるのだということを、これは・・・書く必要がある・・・後のクリスチャンに伝える必要があると感じたのだと思うのです。

もう一度、今日の箇所を読みます。

「8:1 その後、イエスは町や村を巡って神の国を説き、福音を宣べ伝えられた。十二人もお供をした。8:2 また、悪霊や病気を治してもらった女たち、すなわち、七つの悪霊を追い出してもらったマグダラの女と呼ばれるマリア、8:3 ヘロデの執事クーザの妻ヨハンナ、スザンナ、そのほか多くの女たちも一緒であった。彼女たちは、自分の財産をもって彼らに仕えていた。」

先に言ったように、使徒達については、8 章では、「お供」つきそいから、9 章では、「力と権威」を授けられて遣わされる存在。10 章では、12 使徒が、72 人のその弟子達の先達となり、あるいはリーダーとなったと、時系列に、彼らが次第に、イエス様によって用いられていることを基調に述べるのですが、その華々しい使徒や弟子達の背後にあって、女性部弟子達というべき、女性達の働きと支えなくして、なかったのだと言うわけです。そして、特に 3 人の女性の名をあげます。

この書き方を見ると、この 3 人に共通するのは、3 人とも、「悪霊や病気を治してもらった女たち」だということです。

7 章の終わりで紹介した罪深い女とはちがいますが、悪霊や病気をもつ女は、往々にして、当時は罪ある女とみられる向きがありました。罪があるから、悪霊に憑かれるのだ、罪があるから、長血なのではないか、子が生まれないのではないか、病気を持つのではないかと・・・ルカは、女性が用いられた、特に、もともと悪霊持ち、病気持ちであった女たちが、イエス様、弟子達を、支え、仕えたのだと。

マグダラのマリアは、その中でも、程度の重い悪霊付きだと。一つどころか、二つどころか、七つも悪霊に憑かれていた・・・(7は完全数。絶望的な悪霊付き。)だと。

それでも、彼女たちが用いられたのだ！と。

スザンナは、ここにしか出てこない人で、名前以上のことが何もわからない素性の知れない人です。「ヘロデの執事クーザの妻ヨハンナ」は、かなり詳しく説明されています。イエス様を殺す当時の権威、ヘロデ王のその側近である執事の妻だということです。彼女も、この言い方からすると悪霊や病気を治してもらった一人な

んだと思います。余計な心配かも知れませんが、おそらく離縁されたのではないかと・・・少なくとも、離縁覚悟で、支えた人だと想像出来ます。イエス様とその弟子達を支えるには、かなり厳しい立場であり、当時の女性の地位からすると、一言で言って、すべてを失う、命がけの支援、支えであったことを想像するのです。

こんな大切なところで、ちょっと脱線しますが、NHK の大河ドラマで、『利家とマツ』というのがある



りました。加賀百万石の領主、前田利家を支えたマツを描いたものです。偉人の背後に女性の支えがある、それは、こうした大河ドラマの一つのジャンルというかテーマなんだろうと思います。特に、このドラマでは、利家の妻マツだけでなく、秀吉の妻おね、佐々成政の妻はる、にも焦点を当てます。このドラマの脚本家の竹山洋という方が、当時、NHK スタジオパークで、「日曜日は散歩がてら教会の礼拝に行っています。牧師の説教を聞きながら、こおは違うなあなどと、批判をしているような人間です。」と、自己紹介をしておりましたが、聖書に影響を受けたのでしょうか。

いずれにしても、脚本家ではないですが、ルカが、脚本家の書く台本のように、彼女の立場を詳しく述べることで、当時の人には、これほどの人ですから、有名な、ある意味、あのクーザの妻がキリストの弟子となったと、事件だったと思われるわけですが、それを知らない、後のクリスチャンたちにも、彼女の立場を詳しく記録し、残すことで、想像せよと、黙想せよと、何があったのか、彼女は、何を献げたのか？すべてをささげたのだ、彼女は、命を献げたのだと、理解せよと、私たちに、伝えているのだと思うのです。

そして、こう付け加えることも彼は忘れていません。そうした女性は、3人ではないと。**「そのほか多くの女たちも一緒にあった。」**と。

「彼女たちは、自分の財産をもって彼らに仕えていた。」と。財産と言う時、時に、弟子達もたじろぐ程の、高価な香油が献げられたが、それ以外にも、具体的には、お金と言うより、おにぎりや味噌汁ではありませんが、パンとぶどう酒を調達し、遣わされて伝道に出て、ボロボロになった服をあらう、ほつれを縫(つくろ)い、それでもだめなら、新しい服、古い服を調達して用意した・・・さあ、何も心配なされるな、命がけで、行ってらっしゃいとばかりに、背中をたたいて送り出したと言うことではないでしょうか。

さて、今朝、マリヤ、スザンナ、ヨハンナ、多くの女性達に思いを巡らしましたが、私たちの記憶からは、消えていくような人たちです。

でも、この週。ここから遣わされていく私たちを、忘れないで、尊い神様の働き人として期待し、用いて下さる神さまを見上げながら、ここから出ていきましょう。